

マルグリット・オドゥ 『マリー＝クレール』 考

— 20 世紀文学黎明期におけるスプリングボードとしての可能性 —

東海 麻衣子

はじめに

1910 年、マルグリット・オドゥ Marguerite Audoux という無名のお針子を書いた自伝的小説『マリー＝クレール』 *Marie-Claire* が世に出るや、わずか数週間で 7 万 5000 部という驚異的な売り上げを記録した。

オクターヴ・ミルボーは、序文において、次のように述べている。

『マリー＝クレール』は、じつに堂々たる風格の作品だ。その簡潔さ、真実性、気高さ、深み、新鮮さには、感動させられる。この作品にあっては、事物も風景も人物も、すべてが所を得ている。それら一つ一つは、一筆描きの筆致で表現され、描写されており、事物、風景、人物を生き生きとしたもの、忘れがたいものになっている。その描き方が、あまりに的確で、絵画的で、色彩豊かであるため、読者はほかのどんな描き方も望まなくなる。特に我々を驚かせ、圧倒するのは、その内面的行動の力強さと、この本にふりそそぐ優しく朗らかな光、よく晴れた夏の朝の太陽のような光だ。読者はしばしば、大文豪の筆になるかと思われるような文章に出くわす。それは、今やまったくと言っていいほど耳にすることもなくなった、我々の精神を驚嘆させる響きである¹⁾。

また、『マリー＝クレール』刊行直後の 1910 年 11 月、「ヌーヴェル・ルヴェ・フランセーズ」誌の書評において、アラン＝フルニエは、次のように述べている。

お針子が小説を書き得たということが重要なのではない。驚くべきはそこではない。驚嘆されることであり、説明を要するのは、この本の完璧な簡潔さと、稀にみる壮大さである。

文学は、この 30 年間、おそらく、ソローニュの農民たちのもとで繰り広げられる『マリー・クレール』第二部ほど美しい、精神生活の詩の一つも生み出すことはなかった²⁾。

これほどの賛辞が捧げられた小説とは、どのような小説なのだろうか。ほかにも、多くの作家たちが、『マリー＝クレール』を高く評価し、実に熱狂的とも言えるほど、この作品を支持している。

この作品の何が、作家たちから、このような敬意と擁護を引き出したのだろうか。本稿では、その要因について考察をめぐらしたい。そして、『マリー＝クレール』の果たした役割を、新しい文学の黎明期という文脈において考えてみたい。

作品誕生まで

マルグリット・オドゥは、1863年、フランス中部に位置するシェール県の村サンコワンに生を受ける。4歳の時に母親を亡くすと、酒浸りになった父親はマルグリットと3歳上の姉のマドレーヌを残して、出奔してしまう。それによって、マルグリットは孤児院で幼年期を過ごすことになった。13歳で孤児院から出ると、それから約四年間、羊飼いとして働く。その後18歳でパリに出て、お針子仕事をして生活していくのだが、『マリー＝クレール』という作品は、ここまでの人生を下敷きにした自伝的小説となっている。

では、こうした経歴の持ち主が、なぜ小説を書くことになったのだろうか。そのきっかけは、ミッシェル・イェールというペンネームで小説を書いていた法律科の学生ジュール・イールとの出会いにあった。オドゥは、37歳から49歳頃まで、この12歳年下の文学青年と生活を共にするのだが、それによって、彼の仲間である芸術家たちとも親交を深めていく。パリ近郊のカルヌタンに別荘をもち、「グループ・カルヌタン」として週末ごとに集まっていた芸術家仲間はまた、「ヌーヴェル・ルヴェ・フランセーズ」誌の初期グループとも重なり合う。

1908年11月、新しい文学を切り開こうとする仲間たちは、アンドレ・ジッドを中心に、「ヌーヴェル・ルヴェ・フランセーズ」誌を創刊する。しかしながら、創刊号は、旗頭として立てた有力な批評家ユージェヌ・モンフォールの背信行為によって、理想とは異なるものに仕上がってしまう。創刊メンバーは、モンフォールを除名した後、改めて創刊号を作り直す。こうして、1909年2月、「ヌーヴェル・ルヴェ・フランセーズ」誌の正式な創刊号が刊行される。発表の場を得た若き作家たちは、旧態依然とした文学状況を打破すべく、日々議論を交わし、新しい雑誌のもと、新しい文学を模索していく。

オドゥが知らず知らずのうちに入り込んでいたのは、こうした場であった。中でも、二つのグループを結び付けていたシャルル＝ルイ・フィリップとの交流が、オドゥと他の多くの作家たちとの友情を生み出していく。そして、若く、希望に燃え

る芸術家たちは、オドゥの巧みな話術にひかれ、彼女に小説を書くよう勧める。オドゥは、発表するつもりもない小説を、自分の楽しみとして書き溜めていったが、ある時、「グループ・カルヌタン」の作家たち一同が目にするところとなり、彼らに大きな衝撃を与える。こうして、屋根裏部屋の引き出しに隠されていた『マリー＝クレール』は、日の目を見ることとなったのである。

オドゥ熱

若き芸術家たちは、大切な友人マルグリットの書いた『マリー＝クレール』に、確実な成功をもたらすべく奔走する。まず、彼女の草稿のチェックをフィリップとジッドが行い、全体の体裁をヴァレリー・ラルボーが整える。というのも、学校で学んだことのないオドゥには、綴りの知識が圧倒的に欠けていたからだ。だが、それを補って余りある天性の文章力が、オドゥにはあった。ジッドに宛てた手紙からは、オドゥが、自らの文章に対して独自の美学を有していたことがうかがえる³⁾。

次に、画家のフランシス・ジュルダンが、文壇の重鎮であるオクターヴ・ミルボーに、『マリー＝クレール』を見てもらうよう、取り計らう。不遜とも言える若者の申し出にしぶしぶ原稿を手にとったミルボーであったが、たちまちこの小説に心を奪われてしまう。「パリ・ソワール」紙の記者として、当時の様子取材し、後にマルグリット・オドゥの評伝を書いたジョルジュ・レイエの言葉によれば、ミルボーはすっかり「オドゥ熱」*« la fièvre Audoux »*⁴⁾に罹ってしまったのだ。

ミルボーは、読み終わるとすぐ、「グラン・ルヴュ」誌の編集長であるジャック・ルシェのもとに駆け込み、次号に『マリー＝クレール』を掲載するよう、誌面の差し替えを命じた。続いて、ファスケル社へ乗り込むと、直ちにこの小説を出版するようにと指示した。こうして、大いに困惑しながらもミルボーに従わざるを得ない雑誌社と出版社によって、まず、1910年5月、「グラン・ルヴュ」誌に、ジャン・ジロドゥの序文がついた『マリー＝クレール』が全文掲載される。当時、一つの作品が全文掲載されるのは、極めて異例なことであった。ましてや、まったく無名の作家の作品である。ミルボーの鶴の一声が、どれだけの威力をもっていたかがうかがわれる。

そして、同年10月、ファスケル社からミルボーの序文がついた『マリー＝クレール』が刊行されると、パリ中が大騒ぎとなった。新聞記者たちは連日、五階までの狭い階段をものともせず、オドゥの質素なアパートマンを訪れた。彼らが次々と掘り起こしてくる「奇跡」のエピソードに、来る日も来る日も庶民の目は釘づけになる。あることないことを書き立てる記者たちも多い中、彼女の本に心酔し、その後

大切な友人となるものもいた。N.R.F. 社から派遣されたアラン＝フルニエは、戦争で帰らぬ人となるまでの三年あまり、オドゥと友情を育み、彼女から大きな影響を受けることになる。

こうした出会いも含め、この年、オドゥはあらゆる騒ぎの中心に居続けた。そのうちに、文学賞の季節がやってくる。彼女の友人たちが、『マリー＝クレール』をめぐり、フェミナ・ラ・ヴィ・ウルーズ賞とゴンクール賞の行方を心配する様が、アラン＝フルニエとペギーの書簡や、ラルポーとオドゥの書簡などに残されている。

ちなみに、アラン＝フルニエも、ヴァレリー・ラルポーも、『マリー＝クレール』の舞台を自分の目で確かめるべく、オドゥの故郷の地へと向かい、いわゆる「*pèlerinage*」を行っている。アラン＝フルニエは自転車で、ラルポーは、レオン＝ポール・ファルグと共に自家用車で、その地をめぐり、どちらもオドゥに嬉々として報告の手紙を書き送っている。彼らもまた、「オドゥ熱」にうかされていたと言えるだろう。

そして、仲間たちが一喜一憂する中、1910年12月4日に、フェミナ・ラ・ヴィ・ウルーズ賞の選考が行われた。女性のみ約20人の審査員によって授与されるこの文学賞は、1904年、ラ・ヴィ・ウルーズ賞として設立されたが、1920年代、フェミナ賞と改名され、現在に至る。

このフェミナ・ラ・ヴィ・ウルーズ賞をめぐり、ジャン・カノラとマルグリット・オドゥが、最終選考に選ばれていた。争点となったのは、『マリー＝クレール』の作者が、本当にオドゥなのかという点だった。人並みの教育も受けていない彼女に、これほどの作品が書ける訳がないと考える者が多く、真の作者は、前年1909年の暮れに世を去ったシャルル＝ルイ・フィリップであるという噂が広まっていた。だが、この噂を打ち消す最も有力な切り札となったのは、1910年2月、「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」誌から刊行されたフィリップ追悼号に、オドゥが寄せたすばらしい文章だった⁵⁾。フィリップの死後、その思い出を綴ったのが、追悼される本人のフィリップではあり得ない以上、マルグリット・オドゥの文才は保障済みである、と結論づけられたのだ。こうして、20人中11人という僅差で、第七回フェミナ・ラ・ヴィ・ウルーズ賞は、『マリー＝クレール』に授与された。その直後、ゴンクール賞の選考が行われるが、ミルポーの猛烈な援護射撃にもかかわらず、オドゥの受賞は叶わなかった。

これらが、マルグリット・オドゥを取り巻く出版界の椿事であり、新しい文学の担い手たちの熱狂だったが、当のオドゥは憔悴しきっていた。彼女自身は、作家となるつもりはなく、「ジュルナル」紙からの短編連載の申し出も、躊躇なく断ってい

る。オドゥが二冊目の小説『アトリエ・ド・マリー＝クレール』を世に送り出したのは、処女作発表から10年後の1920年のことであった。「エクセルシオール」誌に連載され、ファスケル社から出版されたという事実は、出版界から依然注目されていたことを裏付けるものだろう。処女作に続き、第二作目も文壇から高く評価され、彼女には、莫大な財産がもたらされた。しかし、これらの財産は、養女イヴォンヌの残した三人の子供を、養子として育てる中で、費やされていった。オドゥは、生涯お針子仕事を続け、そのかたわら、気晴らしのため、また現実逃避のために小説を書いた。75歳で亡くなるまでに、『マリー＝クレール』を含め、計四冊の小説と数点の短編、エッセイを世に出している。

オドゥはまた、芸術家たちの良き友人であり続けた。フィリップやアラン＝フルニエ、オクターブ・ミルボーは世を去ったが、フランシス・ジュルダン、レオン＝ポール・ファルグ、レオン・ウェルトらとは、終生変わらぬ友情を育んだ。それによって、マルグリット・オドゥの名は、作家たちの残した文章の中に散見できる。

また、現在では、フランスの女性雑誌「マリー・クレール」がそのタイトルを踏襲したことにより、世界中の女性たちが、それとは知らず、マルグリット・オドゥの小説名に親しんでいる。

既成概念への挑戦

以上、『マリー＝クレール』誕生までの経緯を見てきたが、次に、この作品が広げた波紋について考えてみたい。何が、これほどまでに作家たちの情熱を掻き立てたのだろうか。

『マリー＝クレール』は、三部に分かれており、第一部は修道院、第二部はソーローニュの森、第三部は再び修道院を、それぞれ主な舞台としている。オドゥと同郷であるアラン＝フルニエは、とりわけ第二部に感銘を受け、『グラン・モーヌ』の舞台に、その地を選んだわけだが、しかし、多くのキリスト教徒が注目したのは、第一部と第三部であった。

ベルナール＝マリー・ガローは、次のように書いている。

修道女と司祭の恋愛を想起させる描写は、クローデルを怒らせるものだった。1910年12月、クローデルは、「オドゥ嬢のまったく無味乾燥な本を取り巻く騒動には、いらだちを覚える」と書いている。カトリックの作家が、見過ごすわけにいかないのは当然だろう。ベツレヘム神父にいたっては、お針子作家の没後、一か月半にして、この「退廃的で反教権主義的な自伝的小説」を禁書にし

た 6)。

『マリー＝クレール』には、主人公マリー＝クレールの母親的存在であるシスターマリー＝エメの恋愛が描かれる。それは、修道女の立場で、司祭と恋に落ちるといふ大変なタブーを犯すものであった。第一部では、シスターマリー＝エメの妊娠、死産、それに続く司祭の自殺が、ほのめかされている。そして、第三部で、マリー＝クレールと再会したシスターマリー＝エメは、以下のような言葉を残す。

「私のかわいい娘、よく聞いて。決して、修道女などになってはいけませんよ！」シスターマリー＝エメは、悔恨に満ちた溜息のようなものを吐くと、言葉を継いだ。

「私たちの着ている黒と白の修道服は、私たちが、力と光をもつ者であることを皆に示しています。そして、あらゆる涙が私たちの前で流され、あらゆる苦しみが私たちに癒されたいと望みます。でも、誰一人、私たちの苦しみを気にかけてくれる人はいません。まるで、私たちには顔がないかのように」⁷⁾

キリスト教徒が、到底看過できない告白であろう。しかしながら、修道女となつたばかりに、女性として、人間としての喜びの一切を、葬らざるを得なかったシスターマリー＝エメを、誰が非難できるだろうか。〈悪徳〉を犯した彼女は、ハンセン病患者収容所の看護婦として、僻地に送られていく。それを当然の報いとみなすことが、神の意志だろうか。

作者オドゥは、少女の目を通して見た、キリスト教と共に生きる西洋人の矛盾を描き出す。声高に主張することも、哲学的議論を繰り広げることもない。オドゥは、ただ、マージナルな存在として、世間や常識の外部に身を置き、聡明な観察者の目で見つめることで、既成概念に疑問を呈したのである。

シスターマリー＝エメの意志は、天に通ずることはなかったが、自由を求めるその精神は、マリー＝クレールへと確実に受け継がれていく。マリー＝クレールもまた、恋に破れ、失意のうちに修道院に舞い戻ってきたのであるが、やがて、自由な世界へと羽ばたいていく。そして、主人公が、パリに行くため、汽車に乗るシーンで、小説は幕を閉じる。最後のフレーズを見てみよう。

汽車は、最初の汽笛を鳴らした。それはまるで、私に何かを予告しているかのようにだった。そして、走り出すと、二度目の汽笛が、大きな叫び声のように

鳴り響いた⁸⁾。

鳴り響く汽笛はまるで、これから待ち受ける苦難を予告しているかのようだ。しかし、何があろうとも、マリー＝クレールはそれらを乗り越え、自分の人生を掴み取っていくだろうことが予感される。強いられたつらい運命にもかかわらず、主人公は、一貫して、自分の自由な意思で人生を切り開いていくという姿勢を崩さない。困難に会いながらも、決して生きる喜びを見失わないのである。

1913年へ

では、こうした小説が待ち望まれていた当時の文学状況とはいかなるものだったのか。

1920年に出版されたオドゥの二作目『アトリエ・ド・マリー＝クレール』の書評において、ヴァレリー・ラルボーは、次のように述べている。

ことわざにもなったラテン語の引用にもかかわらず、一般に、詩は文学的教養の賜物であり、人は勉強によって詩人となると信じられている。だが、詩は、いや、文学は、精神のもつある種の優美さや気品、特別に繊細な創造力や感受性によって、自然に形作られるものなのである。それは、書物や学問から得る知識とは何の関係もない⁹⁾。

ラルボーは、文学的教養もなく、綴りもあやふやなオドゥを、生まれながらの詩人とみなし、こうした考えを表明している。これは、「グループ・カルヌタン」や「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」の仲間たちの多くに認められる傾向であった。

例えば、フィリップは、1897年の時点で、次のように述べている。

アナトール・フランスは素晴らしい。彼は何でも知っているし、何でも表現する。彼は博覧強記の人だ。しかし、それだからこそ、彼は亡びゆく作家群に属しているのである。彼が19世紀文学の総決算といわれる所以もまたそこにあるのだ。今必要なのは、野人だ。書物の中で神を研究することなんかしないで、神の間近に生きなければならなかったのだ。そして自然な生活を見通さなければならぬ。力強さを持たねばならないし、憤怒さえも抱かねばならない。甘さとディレッタンティズムの時代は去った。今日は、情熱の時代の黎明である¹⁰⁾。

そして、次のように続ける。

ドストエフスキーの『白痴』を読んだ。これこそ野人の作品だ。人間のあらゆる問題が、情熱をたたえて作中に蠢いている。ぼくはフランス文学でこれほどこくのある作品を知らない¹¹⁾。

ここで言われている「野人」«barbare»とは、何だろうか。それは、死刑の是非や、キリスト教の真価といった問題に正面からぶつかり、愚直に、真剣に、人間の生き方を模索しようとする者のことではないだろうか。

オドゥは、修道女の恋愛というタブーに踏み込むことで、女性の自由や、キリスト教文化の中で生きる人間の生き方を世に問うた。純粋な魂が、慣習にまっすぐな視線を向け、人に「白痴」と呼ばれるような疑問を抱く。その意味で、マリー＝クレールは、ムイシュキン公爵と同じ資質を有する者である。

フィリップは、「甘さとディレッタンティズムの時代は去った」という言葉で、19世紀文学との決別を宣言し、新たな文学の指針として、ドストエフスキーのようなモデルを夢見たのではなかろうか。こうした欲求はまた、『地の糧』(1897)や『背徳者』(1902)を通して、象徴主義的世界から抜け出ようとするジッドにも見受けられる。

そして、1913年、『マリー＝クレール』出版の二年後のことだが、若き文学者たちの意識、新しい時代の波は、ジャック・リヴィエールによって、明文化される。

突然何かが動いたということに気が付く、我々はそんな瞬間の一つにさしかかっている。船が、夜のうちに、錨をおろしたまま、その向きを変えるように、そして、港に臨んでいた舳が、朝には、沖を目指しているように — 文学は新たな地平を得たのだ¹²⁾。

リヴィエールは「冒険小説論」と題されたこの有名な論考において、象徴主義の終焉を宣言し、新しい小説「ロマン・ヌーヴォ」の出現を歓迎している。もはや、「心のなげき」も、「メランコリー」も、「感情のほとぼしり」も求められてはいない。今、求められているのは、「行動」の文学であり、外界との接触によって生み出される小説、すなわち「冒険小説」«roman d'aventure»であると言う。そして、内から外へ飛び出したこの若々しい小説、いまだ定義しきれないこうした小説を待ち望む自分たちの感覚を次のように説明する。

今日、ぼくたちはより激しく、より快活な喜びを知っている。すべては、生きる喜びのうちにある。ぼくたちは、新しい生き方を目覚めさせるためにいるのだ。19世紀が辿りついた闇や倦怠の上に、突如一陣の風が吹き、我々の頭をふらふらさせていた夢の数々を撒き散らす。ぼくたちは、外に出て、すっと立ち、しっかりと晴れやかに、そして、まだここにいることに感謝している自分を見出すのだ。(中略) この突然の若さは、世界とつながるすべてのことをすばらしいものにしてくれる。喜びを味わうには、前に進むだけでいい。その喜びとは、出来事の只中にいるという喜び、人々の只中にいるという喜びなのだ¹³⁾。

そして、まさしく、この宣言がなされた1913年、フランス文学界は豊饒の時を迎える。

ヴァレリー・ラルボー「A.O.バルナブース全集」、アラン＝フルニエ「グラン・モーヌ」が「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」誌に掲載され、マルタン・デュ・ガール『ジャン・バロワ』が*N.R.F.* 出版部から刊行される。そして、ジッドが痛恨のミスを犯し、原稿を突き返した、プルースト『失われた時を求めて』第一巻「スワンの家のほうへ」が、グラッセ社から出版されるのである。

おわりに

古い文学に嫌気がさし、新しい文学を待ち望んでいた若き作家たち。いずれ劣らず、教養人であり、多くは象徴主義から影響を受けた彼らは、それまでの文学に齟齬を覚えながらも、打破する方法を見出せないでいた。「野人」になるとはどういうことか。そのために必要な文体はどのようなものか。それを考えあぐねていた彼らの目の前に、真の「野人」が現れた。

ほとんど本も読んだことがないオドゥが、美しく簡潔な文体で、明るさと行動に溢れた詩的世界を編み出したとき、新しい文学を切り開こうとする作家たちは、自由な世界から突如射しこんだ光に、「新たな地平」を見たのではなかったろうか。

ジャック・リヴィエールの宣言からは、こうした一連の流れを定義づけようとする意志が感じ取れる。「ぼくたちは、外に出て、すっと立ち、しっかりと晴れやかに、そして、まだここにいることに感謝している自分を見出すのだ」といったリヴィエールの文章は、まるで、『マリー＝クレール』の世界観を映し出しているかのようだ。また、1913年、「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」誌の誌面を飾った、新たな文学を象徴するような二つの小説『A.O.バルナブース全集』と『グラン・モ

一ヌ』が、「オドゥ熱」に罹った二人の作家によるものであったことは、『マリー＝クレール』の果たした象徴的役割を示唆するもののようにも思われる。

以上、1913年、一斉に花開く多くの偉大な才能を刺激した一つの書物として、『マリー＝クレール』を位置づけることは、20世紀文学について、新たな視座を提供する可能性を、含んでいるものと考えられるのである。

注

Marguerite Audoux (1863-1937) の伝記に関する記述は、Georges Reyer, *Un Cœur pur : Marguerite Audoux*, Grasset, 1942. および Bernard-Marie Garreau, *Marguerite Audoux, La Couturière des lettres*, Tallandier, 1991. を参照した。

1) Octave Mirbeau, Préface à *Marie-Claire*, Fasquelle, 1910, pp.VI-VII. (なお、翻訳は堀口大學訳を参照した)

2) Alain-Fournier, « Marie-Claire, par Marguerite Audoux (*La Grande Revue*) » in *La Nouvelle Revue Française*, 1^{er} novembre 1910, p.616. (XXIII)

3) « Fasquelle vient de m'envoyer les deuxièmes épreuves, je les ai relues sans y trouver de fautes. Cependant, à la page 14, ligne 17, j'aimerais qu'il y ait « des débris de gâteaux ». Ce mot « débris » avait été oublié par le dactylographe, cela me semble déranger le balancement de la phrase, et me fait un peu l'effet d'une chose tronquée. Cela vient peut être tout simplement de ce que j'ai toujours eu cette phrase dans l'oreille. Aussi je vous laisse juge, et ce que vous déciderez sera bien.

Vous voudrez bien aussi vous arrêter à la page 93, ligne 7, où je lis « répondit d'un air malicieux ». Il me semble que cela n'est pas français, « répondre d'un rire malicieux » me paraîtrait bien s'il n'y avait pas de paroles ensuite, mais dans le cas présent, « répondre avec un rire malicieux » me paraîtrait mieux. Il en est de cette phrase comme de l'autre. Je suis peut-être dans l'erreur et je vous laisse juge. » (Georges Reyer, *op.cit.*, p.30.)

4) « Pendant huit jours Mirbeau ne vit que de *Marie-Claire*. Il a la fièvre Audoux. Il ne pense qu'à ce livre. Il ne parle que de cette femme. Il ne l'a jamais vue. Il ne sait presque rien d'elle. Mais il exalte sa vie avec une telle passion, son œuvre avec un tel enthousiasme qu'on pourrait le croire devenu subitement amoureux fou. » (*Ibid.*, p.130.)

5) 1910年2月15日付第14号の「ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ」誌は、「Numéro consacré à Charles-Louis Philippe」と銘打たれ、十数名の作家によるフィリップ追悼

のための文章が掲載された。その中で、マルグリット・オドゥは、ポール・クロードル、コンテス・ドゥ・ノアイユ、アンドレ・ジッドらと肩を並べ、「Souvenirs.」というエッセイを寄せている。

6) Bernard-Marie Garreau, *op.cit.*, p.28.

7) Marguerite Audoux, *Marie-Claire*, Fasquelle, 1910, pp.249-250.

8) *Ibid.*, p.261.

9) Valéry Larbaud, « Marguerite Audoux » dans *Ce Vice impuni, la lecture*, Domaine française, Gallimard, 1941, p.245.

10) Charles-Louis Philippe, « *Lettres de Jeunesse à Henri Vandeputte (2^e série)* » in *La Nouvelle Revue Française*, 1^{er} décembre 1910, p.714. (XXIV)

11) *Ibid.*, p.715. (なお、翻訳は鈴木健郎訳を参照した)

12) Jacques Rivière, « *Le Roman d'aventure (I)* » in *La Nouvelle Revue Française*, 1^{er} mai 1913, p.748. (LIII)

13) Jacques Rivière, « *Le Roman d'aventure (II)* » in *La Nouvelle Revue Française*, 1^{er} juin 1913, pp.761-762. (LIV)

Marie-Claire de Marguerite Audoux, possible tremplin ?

Maiko TOKAI

En 1910, *Marie-Claire*, roman autobiographique de Marguerite Audoux, connaît un immense succès en France. Alors qu'à cette époque, la vente des romans n'atteint en général que les 2.000 exemplaires au plus, il se vend à 75.000 exemplaires. Dans leur grande majorité, les lecteurs le considèrent comme une curiosité car son auteur, ancienne bergère sortie de l'orphelinat, est une couturière quasiment aveugle. Mais les écrivains qui la découvrent sont frappés par son exceptionnel talent. Notamment Charles-Louis Philippe qui lie avec le premier groupe de *la Nouvelle Revue française*.

L'examen du mouvement littéraire, brillamment révélé en 1913 – l'année du Miracle –, révèle les relations entre le groupe *N.R.F.* et Marguerite Audoux. Cette année où Jaques Rivière dans un manifeste passionné, « *Le roman d'aventure* », définissait la nouvelle direction du roman, *la Nouvelle Revue française* publie « *A.O. Barnabooth, Ses Œuvres complètes* » de Valéry Larbaud, « *Le Grand Meaulnes* » d'Alain-Fournier, « *Jean Barois* » de Roger Martin du Gard.

La référence aux écrits de ces auteurs, fait apparaître une conscience commune pour « le roman nouveau » qui se cristallise vers 1913. Fortement marqués par le *Symbolisme*, ils étaient engoncés dans « l'obscurité et l'ennui » du XIX^e siècle, et il leur fallait devenir des « barbares » capables d'exprimer le cri de l'âme comme le faisait Dostoïevski.

Il est possible que Marguerite Audoux, authentique « barbare », leur soit soudainement apparue comme une révélation propre à leur ouvrir cette voix qu'ils cherchaient. Ainsi, *Marie-Claire* aurait servi de tremplin à ces talents épanouis simultanément en 1913. C'est là, pensons-nous, une suggestion qui pourrait éclairer d'un jour nouveau le mouvement littéraire du début du XX^e siècle.